天理市（てんり）（奈良県）

職員の意識改革と市民力の高揚で図る行財政改革の推進と、心のまちづくり

宗教文化都市・天理の「心のまちづくり」

昭和29年に奈良県下4番目の都市として誕生した天理市。ここには良質なイチゴや柿などを産するのどかな田園風景を縫うように、日本最古の道として知られる山の辺の道、崇神天皇陵や三角縁神獣鏡を出土した黒塚古墳をはじめとする古代大和の有力古墳群、さらに伊勢神宮と並ぶわが国最古の神宮であると「日本書紀」にも記述された石上神宮（いそのかみじんぐう）や大和神社（おおやまとじんじゃ）など数多くの社寺仏閣・史跡が点在している。そのたたずまいはまさに、豊かな自然環境を生かした人々の暮らしの中に、歴史と文化が混然と息づく田園文化都市の様相である。

また天理市には近代以降、その市名の由来ともなった天理教の宗教施設や教育文化施設などが多数建てられ、天理教の成長とともに都市としての発展を歩んできたユニークな歴史も持っている。いわば古代から中世、近世、近・現代に至る過程に醸成された、多彩な宗教文化が今も脈々と共存する、ほかに類を見ない宗教文化都市という側面がある。

一方で、鉄道や車で1時間以内に位置する大阪市・京都市、そして奈良市に近接し、併せて、LSIや液晶ディスプレイなどの研究施設・工場を擁するシャープ天理研究所が立地するなど、現代的かつ先端的な顔も併せ持っている。

そんな天理市において3期10年目の任期を迎えている南佳策市長が最初の選挙でマニフェストとして掲げ、現在も天理市のまちづくりの基礎と位置付けているのが「いきいき百歳天理のまちづくり」。すべての市民が「生きてきてよかった」と実感でき、地域を心から誇れるようなまちづくりに「健康づくり」「学習活動」「ボランティア活動」を基本理念に置き、昨今の世相を念頭に、天理市民の社会参画意識を醸成するための各種施策を実施している。

南　佳策（みなみ　けいさく）
天理市長

「私には奈良県の職員として公務員生活を終えて、さぁ、もうすぐ悠々自適の老後の生活、具体的には憧れの目で見ていたまちの写真家になろうかと考えていた時期に、ひょんなことから市長選投票日まで1カ月と数日前に担ぎ出されるという急転直下の人生を歩んできた経緯があります。そのため、通常マニフェストとして掲げられることの多い企業誘致など、今の社会状況を考えたらとうてい実現の可能性が疑問視されるような施策は一切掲げませんでした。

そうして天理市政が陥っている行財政状況の悪化からの脱却を不退転の誓いとし、一見抽象的に思われるかもしれませんが、実は最も大切な精神的分野で市民が元気に生きる指針とすることのできるような事柄を、あえて最重要の目標にしようと決めました」

結果は多くの市民の支持を得て、6人の候補が乱立した選挙での当選となったわけだが、南市長はひょうひょうとした表情と語り口で「今の天理市政に最も大切と思ったことを掲げ、それで落選するのなら仕方ない」、実はそう覚悟していたと回想する。

南市長はさらに「『天理っ子』育成推進運動」も掲げているが、明るく、はっきりあいさつできる子どもを育てよう、これは実は子どもの問題というよりはむしろ大人の世界の問題であり、その主役は家庭、学校、地域に課せられた課題であるという考え方だという。

高齢化社会をにらんで対象年齢を広く設定した「いきいき百歳天理プラン」と併せて、次代を担う子どもたちのあいさつ運動も前面に打ち出したのだ。宗教文化都市・天理市ならではの「心のまちづくり」といえるだろう。

神秘的なたたずまいの第10代崇神天皇陵（全長242m）

もちろん都市としての発展に必要な各種産業の振興やインフラ整備（例：県内で初の下水道整備普及率100％目前）などにも十分に目を向け、その実現に最大限の努力を払いながらも、一方で南市長がこうした精神的部分での市民力強化にこだわるのは、「地域の活力やうるおいは、そこに暮らす人々の豊かな心の所産であり、それがまさにまちづくりの基本」であるということ。さらにその基本をまず樹立しなければ、外部からどのような活性化策を落下傘的に持ち込もうとしても効果は一時的であり、地に根付いたものにはなりにくいと考えているからにほかならない。

いきいき百歳天理プランと天理っ子育成推進運動

何よりも「人が基本」を旨とする天理市政、その要としての「いきいき百歳天理プラン」と「『天理っ子』育成推進運動」の具体化に向けて、天理市ではおよそ次のような施策を実施している。（百歳天理推進事業（施策はいずれも平成22年度用））

1．基本理念＝体力の維持・増進は自分の力で図る「健康づくり」、百歳まで続ける知識・技術の習得「学習活動」、日々を楽しく生きがいを持って取り組む「ボランティア活動」

2．具体的施策の例示

・健康づくり（食からの健康づくり＝60歳以上対象、百歳天理スポーツ教室＝20歳以上対象）

・学習活動（市民大学講座＝20歳以上対象、山の辺の道文化歴史講座＝年齢不問、写真教室＝年齢不問）

・ボランティア活動（地域安全ボランティア＝高齢者対象）

幽玄な雰囲気が漂う石上神宮

百歳天理事業というと高齢者が対象かと思われがちだが、老若男女が参加している。もっとも当初は高齢者が圧倒的だったものの、最近は市民の理解が進み、参加年齢がかなり幅広くなってきたという。各年齢層の市民が頭と心の健康づくりを図るとともに、高齢者が中心になって地域安全を図る事業（チーム単位で市民への安全啓発、子どもの見守り・声掛けなど）は、結果的に高齢者を筆頭に各世代がまちの運営を担っていたかつてのコミュニティ再生への一助ともなりそうだ。

食からの健康づくりについては高齢者向けの食育事業も実施している。高齢者がより健やかで充実した老後を送るための手段の一つとして、手づくり料理の楽しさを学んでもらい、高齢者が家庭内に閉じこもらないよう、活発な社会交流を促す機会と場を提供することがこの事業の主な目的である。

スポーツ教室は近年の健康志向に応えると同時に病気予防のため、マシーンを使ったストレッチ&マッスルエクササイズによる身体の柔軟性の促進と、日ごろあまり使わない筋肉の活性化を主眼とした事業が実施されている。

また市民大学講座は講師陣が実に豪華である。地域の古代史に関する講座（奈良大学名誉教授・水野正好氏）をはじめ、健康・文化・人生訓・テレビ開発史などの多彩なテーマに、東大寺長老の狭川宗玄氏、奈良大学国文科教授の上野誠氏、シャープ研究所本部・総務部長の福島隆史氏など、天理市に所縁のあるそうそうたるメンバーが並んでいる。安全安心な暮らしをテーマとする講座は、南市長自らが担当した。

雄大な規模を誇る天理教本部はまちのランドマーク

さらに近年の写真ブームを背景としてか、初歩から高度な技術まで学べる写真教室はひときわ参加者の人気が高い。

「『天理っ子』育成推進運動」は「子どもを『あいさつ』で育てる」「子どもは『あいさつ』で育つ」を理念に、あいさつ運動を第一の基本としている。併せて「小さな親切」「きれいなまちづくり」をも基本に置いたさまざまな推進策を実施している。

「天理市は宗教文化都市として培われた精神的な規範を背景に、していいことと悪いことの心得など、従来、家庭や学校などで比較的自然に育てられてきたという歴史があります。しかし、私が市長に就任した当時は全国的にも学校が荒れていた時期で、天理市もまたその例外ではありませんでした。そこで私は古代から現代に至る豊かな宗教文化が今も根付いているはずの天理市が、そのような状況を放置すべきではないと考え、礼儀やけじめの初歩中の初歩である『あいさつ』をまず徹底することから、当時の子どもたちの一部にまん延しかけていた悪しき流れを是正しようと取り組むことにしたものです。子どもたちにあいさつの習慣を浸透させることは、堅苦しい鋳型にはめたような礼儀を強いるということではなく、子どもたちが将来、自立した生活を行い、世の中に何らかの形でお返しすることができるようになるための、その出発点だといえます」（南市長）

大和神社の例祭「ちゃんちゃん祭」はまさに野を行く古代絵巻（毎年４月）

大和神社祭礼「御弓はじめ式」

平成15年度から始まったその取り組み体制は非常に手厚い。市長を本部長とする「天理っ子」育成推進本部を置き、家庭や学校、地域などでのあいさつの習慣化を機会あるごとに教え、見守り、イメージキャラクターを活用したポスターを掲示するなど、さまざまな手段を駆使しつつ「あいさつの大切さ」を称揚している。さらに教育長を幹事長とする幹事会が本部の活動を補佐し、育成推進運動に必要な資金の一部を確保するためこれに共感してくださる市民からの浄財も天理っ子育成基金としている。

良好な人間関係を結ぶためのあいさつを当たり前にできる子どもや青年の前には、これに比例して大きな可能性が開けてくるのは自明の理だろう。「小さな親切」や自分のまちを慈しむ「きれいなまちづくり」を自発的に実践する心も、その同一線上にある。

「『天理っ子』育成推進運動」はそういう意味で、単なるあいさつ推進運動でなく、子どもたちの未来を明るく開くための取り組みでもある。

なお「『天理っ子』育成推進運動」には現在、企業および民間の各種団体、まちづくりグループなどが１００団体近く参画し、フォーラムの開催や啓発運動を積極的に展開しており、その輪は広がる一方だ。

流入・流出人口が絶えず変動する大都市圏などでは、このような取り組みは難しいかもしれない。歴史的に宗教文化が深く根付き、人口７万人ほどのまとまりやすい都市規模であることも幸いしているだろう。しかし、それ以前の問題として、市長を先頭に全市を挙げて、こうした心の問題に取り組む体制を整えた天理市の在り方は、教育環境の悪化に悩む日本の児童教育の現状に、地味ではあるものの、小さな一石を着実に投じる試みといえるのではないだろうか。

日本最古の道として知られる山の辺の道

多彩な歴史的資産を活用した観光振興

今回の取材では日本最古の道とされる山の辺の道をはじめ、天理市ご自慢のウォーキングコースをいくつか訪ねることができた。一口にウォーキングコースといっても、その内容は非常に充実している。冒頭に書いたように天理市には古代から中世、近世、近・現代に至る宗教文化の歴史を今に伝える、国宝級の史跡や文化財が数多くあり、それらが山の辺の道など、古代から人々が連綿と踏みしめてきた古街道で縦横に結ばれているのだ。周辺の田園風景、自然環境の充実ぶりも申し分なく、歴史に興味のある人もない人も十二分に楽しめるコースが用意されている（主要なものだけで９コース）。

イルミネーションが美しい冬のイベント「光の祭典」（平成17年創設）

まちと人の活性化を目指して平成17年から始まった「てんりな祭り」

取材の過程では、随所に点在する丈の低い柿の木（刀根早生）畑の間を進む道筋に史跡が展開する、のどかにしてみやびな風景が印象に残った。刀根早生は天理市で生まれた、日本を代表する渋柿の品種だ。日本の柿は渋柿と甘柿に大別されるが、渋柿は新潟県を発祥の地とし、「おけさ柿」などで知られる平核無柿が基本品種とされる。刀根早生柿はこの平核無柿の突然変異種として、天理市・刀根農園（萱生町）において昭和30年中ごろ（新品種の認定は昭和55年）に生まれた。以来、刀根早生柿の栽培は各地に広まっていく。

「柿の生産量は現在、和歌山県が全国トップです。奈良県がその次に位置していますが、その多くは天理市で生まれた刀根早生なのです。奈良名物の柿の葉寿司を巻く柿の葉も、この刀根早生柿の葉が使用されています」（南市長）

関西で盛んな押し寿司を柿の葉で巻くアイデアは、柿の葉の持つ豊かな風味とともに、その殺菌効果に着目した庶民の知恵だろう。近年ではさらに、ビタミンC、K、B類などのミネラル分フラボノイドなどを多く含む柿の葉の薬効研究が進み、血管を強化する作用、止血作用、花粉症予防などの効果を持つサプリメントなどに柿の葉エキスが盛んに活用されるようになった。

ウォーキングの途次、その刀根早生柿の畑が広がる丘陵地帯で休憩し、風味・滋味豊かな柿の葉寿司のランチを食べながら、眼前に広がって古代の雰囲気を濃厚に伝えるのどかな景観に息を飲む――。そんな人々もきっと多いことだろう。

「天理市は大和青垣国定公園に属しています。歴史と自然が一体になったその風景は、ただ眺めるだけでなく、実際に歩いてみることで魅力が何倍にも実感できます。山の辺の道の周辺だけでも年間約20万人がウォーキングを楽しんでおり、当市最大の観光資源なのです。それをより多くの方に知っていただくため、毎年11月開催の『てくてくてんりウォーキングフェスタ』を中心に、四季折々の景観や史跡を生かした各種ウォークイベントを積極的にプランニングしています」（南市長）

そうした機会に天理市を訪れる人々のため、東海自然歩道拠点施設「トレイルセンター」が平成12年にオープンし、毎年多くのウォーカーたちに活用されている。さらに邪馬台国の女王・卑弥呼が中国・魏の皇帝から3世紀に贈られた銅鏡ではないかとの説もある三角縁神獣鏡（33面）と画文帯神獣鏡（1面）が黒塚古墳で出土したことを受けて、黒塚古墳そのものが公園として整備され（平成17年）、隣接地には展示館も開設され人気を呼んでいる。

毎年11月開催の「てくてくてんり」ウォーキングフェスタ

黒塚古墳から出土した三角縁神獣鏡（レプリカ）

また都市再生整備計画に基づく事業（旧まちづくり交付金事業）を活用して、山の辺の道を核とする観光振興・地域振興を図るとともに、「集客交流都市・天理」の実現を目標に平成18年度から22年度にかけ、JR長柄駅前と公衆トイレ整備、道路整備、道標・観光案内板整備、ポケットパーク整備、自然ふれあい体験事業、観光パンフレット作成などを実施した。

「ウォーキングを楽しむ方たちはどうしても50代以上の年齢層が中心になりがちです。今後はより幅の広い年齢層にアピールするような各種の企画を実施したり、ウォーキングコースも自然景観や歴史的景観を損なわないよう配意しつつ、さまざまな再整備を実施する必要があると考えています」（南市長）

そのための方策として、天理市では広域観光への取り組みと併せ、今後は商業・農業との連携、市民の自主的なまちづくり活動との連携の拠点づくりなど、多方面からの取り組みを行う予定である。

さらに恒例のウォークイベント「てくてくてんり」のより一層の発信、環境負荷の少ないウォーキング・ツーリズムそのものへの積極的な誘い、奈良県が進めるポスト1300年祭構想の1つ「記紀・万葉プロジェクト」をはじめとする広域連携の拡充のほか、9つのウォーキングコースの「ブランド化」も図っていく予定だ。

これまで述べてきたように、天理市には他市がうらやむような恵まれた環境のウォーキングコースが豊富にある。進行する高齢化社会の重要課題である市民の健康づくりの観点からも、ウォーキングは全国注目のソフト・アイテムであり、そういう意味からも天理市の取り組みの今後が注目される。

不退転の行財政改革と今後の天理

天理市では昭和60年に天理市行政改革大綱を策定して以来、庁内組織「天理市行政改革推進本部」を中心に各種の取り組みを実施してきた。こうした中で南市長が平成13年秋の就任以来、このままでは市財政は遠からず破綻すると予測し、これを回避するためスリムでしなやかな行財政運営を目指し、その第一段階としていち早く市職員数と市財政の健全化に着手。結果、1期目の4年後には、定数内職員数は910人から830人に、さらに2期目の8年後には750人へと削減。同様に一般会計予算額も260億円から231億円に、またさらに4年後には218億円にとスリム化を果たしている。さらに平成23年度からの5年間を対象とする新たな行政改革実施プランでは「5年間で21億円の財源不足分に見合う経費削減を目指しています。この新たな行政改革大綱と行政改革実施プランは『行政改革実施プログラム2011』と名付け、より一層の実効を挙げるべく、実施するつもりです」（南市長）

市長就任時から新しい市政の車の両輪としてきた不退転の行財政改革と市民に向けた「心のまちづくり」事業。これらは一見、直接には結びつかないように思われるかもしれない。しかし、健全な自治行政の実現に、健全な行財政環境と市民の安寧はどちらも欠かすことのできない不可分の最重要項目である。南市長が就任以来、とりわけその両者を重視してきたゆえんだろう。

折しも2月下旬の取材時、天理市では奈良で開発されたイチゴの新ブランド「アスカルビー」の沖縄向け出荷が佳境を迎えていた。前出の天理市特産の刀根早生柿の沖縄向けの出荷が好評を博したことを受けての、天理の特産物直売事業の一環だ。今後は「天理市生活改善グループ連絡会」が開発に成功した「柿ジャム」などの加工品開発への動きと併せ、天理ブランドの全国発信を目指している。

「今後は自らの行財政改革および、百歳天理事業、『天理っ子』育成推進運動を軸に各種福祉施策をより一層推進していく必要があります。同時に観光振興や農業振興をはじめとする各種産業の振興、商店街（商業）の活性化などの重要課題についても、より一層の実効を挙げることを心掛けていく必要があります。その道は決して平坦ではないでしょうが、私はこの天理市が大好きなのです。私にとっては趣味の写真もそうですが、人間は大好きなものなら、時間も疲れも忘れて一生懸命にやれるものです。そのことを糧に、これからも職員の皆さん、市民の皆さんのご理解とご協力の下、全力で推進していきたいと考えています」（南市長）

天理の未来を握るのは子どもたち（天理っ子）の健やかな成長

平成19年に完成した農業集落排水事業「福住地区処理場」

その執務室の書棚の上には、全国の各市区が提供する各種公共サービスについて、その市区住民からインターネットを通して寄せられた声で選ばれた満足度大賞第9位の表彰状が静かに飾られていた。

取材最終日は晴天に恵まれた土曜日。JR・近鉄の天理駅からはウォーキング支度の老若男女が、天理教の恒例行事に全国から参集した人々とともに、商店街を仲良く歩く姿がごく自然に見られた。大和青垣と形容される天理の、うっすらと青くかすむような遠景が、とても美しい日であった。

（取材・文　遠藤　隆）